

MRI, MRA, 頸動脈エコー, かなひろいテスト, 脳卒中危険因子の点数化, 止血・凝固系の7項目である。MRI, Aは3施設で同一機種, 同一条件下で撮影した。その上で統一した判定基準を設け各種病変を診断した。

【結果】無症候性脳梗塞の危険因子保有率は高血圧21.3%, 心臓疾患19.7%, 糖尿病17.8%, 高尿酸血症16.7%, 未破裂脳動脈瘤では糖尿病10.7%, 高尿酸血症7.5%, 家族歴7.3%, 高血圧7.3%, 頸動脈分岐部病変では狭窄率25%以上でみると高血圧8.0%, 糖尿病7.1%, 心臓疾患6.8%, 等であり, 危険因子保有者の3病変発見率は高かった。

【結論】1) 脳ドックの意義は, 脳卒中危険因子の洗い出しの画像化による証明である。2) 脳卒中の予防には危険因子の治療が不可欠であり, 人間ドックの判定を取り入れた総合判定が重要である。

21.

高齢者骨粗鬆症患者の薬物治療における骨密度の経時的変化 —第1報—

(東京医大八王子医療センター老年科)

○清水武志, 藤井広子, 金谷潔史

【目的】骨粗鬆症の治療薬には, 骨代謝改善剤としてVD製剤, VK製剤, カルシウム製剤, カルシトニン製剤等がある。さらに近年骨Paget病の治療薬として開発されたエチドロネート製剤 (EHDP) も従来の骨代謝改善剤とは異なった作用機序から注目されている。われわれは, 高齢者骨粗鬆症患者の骨密度を経時的に測定することで, 各種薬物治療の効果の違いを比較検討したので報告する。

【対象および方法】厚生省「老人性骨粗鬆症の予防および治療法に関する総合的研究班」の定める診断基準に則って診断した当科外来通院中の高齢者骨粗鬆症患者22名(平均年齢78歳)を対象とした。投薬内訳は, EHDP投与群 (E群) 8例, ビタミン製剤投与群 (V群) 14例 (VD, VK単独, または2剤併用を含む。) である。全例で薬剤投与前に腰椎の骨密度の定量をDEXA法で行い, 約1年(平均観察日数320日)後に骨密度を再測定し, 増加率の有無を両群間で比較検討した。また, 骨吸収マーカーの尿中デオキシピリジノリン, 骨形成マーカーの血

中オステオカルシンを各症例で測定し, 骨密度の増減との関連も検討した。

【結果】全22例中16例(73%)に骨密度の増加があり, 薬剤の効果を示した。E群では8例中6例(75%)で, V群では14例中10例(71%)で骨密度の増加を示し, 両群間での有意差は認められなかった。各マーカーとの関連は, 尿中デオキシピリジノリンが高値の症例は骨密度の増加率が低い傾向を示したが, 血中オステオカルシンについては, 明らかな相関傾向を示さなかった。

【考察】治療薬投与によって73%で骨密度の増加を得たが, 残りの27%は減少していた。投薬効果の有無と各マーカーとの関連および, 各薬剤の効果の差異を症例数を増やして検討を重ねたい。

22.

Zucker Fatty Ratのアキレス腱異所性石灰化における各種石灰化因子の遺伝子発現及び組織学的検討について

(整形外科)

○渡辺 健, 西野誠一, 正岡利紀, 山本謙吾, 今給黎篤弘

(病理学第二)

海老原善朗

(動物実験センター)

米田嘉重朗

【目的】脊柱靱帯骨化モデルであるZucker Fatty Rat (ZFR) のアキレス腱に異所性石灰化が発生することに注目し, その石灰化に関連する因子を遺伝子レベルにて解明し, 又, 病理組織学的検討をおこなった。

【方法】ZFR3ヶ月齢6匹及び6ヶ月齢4匹を用いて以下を検討した。

1. X線学的検索

屠殺後, 後肢を切断しアキレス腱を露出させ軟X線撮影した。

2. 遺伝子発現の検索

ZFRのアキレス腱及び踵骨よりm-RNAを抽出。RT-PCR法にて骨形成因子であるBMP2, 4及び石灰化関連因子であるオステオカルシン (OC), オステオネクチン (ON), オステオポンチン (OP) の遺伝子発現を検索した。